

清姫は、ずっと休まず看病を続けた……しかし、その晩、男は、布団の上で息を引き取った……。

次の日の朝、安珍は、清姫と屋敷の下の畑の隅を掘り……埋めて、その上に石を置いた。まわりにも幾つかの石塔が立っている。

「結局、救えなかったな……。」

清姫がポツリといった。

「いや、あの男は救われたと思う……。」

安珍は、昨日の男の涙を思い出している。

ずっと、醜い身体を人目を避け、苦しみながら……熊野の神の救いを信じて、この中辺路を滝尻まで、あの身体で上って来たに違いない……。

その男が、最後に受けた人のやさしさ……あたたかさ……。

それは、どのような感覚だっただろう……安珍は、なぜか……男を、少しうらやましい気がした。

「尔時世尊。従三昧安詳而起。告舍利弗。諸仏智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切声聞。辟支仏。所不能知。所以者何。仏曾親近。百千万億。無数諸仏。尽行諸仏。無量道法。勇猛精進。名称普聞。成就甚深。未曾有法。随宜所説。意趣難解。舍利弗。吾従成仏已来。種種因縁。種種譬喩。広演言教。無数方便。引導衆生。……。」

安珍は法華経を唱える……。

清姫は、どこからか手折って来たヒサカキの枝を、石の前に差し……しゃがんで、手を合わせている。

「姫！」

また、子どもたちの声が降って来た。

見上げると……小山の斜面に

生えた大きなシイの樹の上から

手を振っている。



清姫は、立ち上がって手を振りかえすと、そちらの方に走って行く……。

そのままシイの樹に登っていく。

安珍は、その無邪気な表情を、まぶしそくに眺めながら、同時に、少し、寂しさを感じている。

清姫が遠い存在だと思う。

……明日は、この真砂の郷を出よう……安珍は、そう思った。